



Data

監督・脚本: ウディ・アレン
 出演: ケイト・ウィンスレット/ジ
 ム・ペルーシ/ジュノー・テ
 ンプル/ジャスティン・ティ
 ンバーレイク/ジャック・ゴ
 ア/デヴィッド・クラムホル
 ツ/マックス・カセラ

👁️👁️ みどころ

50年を超えるキャリアを持つウディ・アレン監督は今、養女からの性的虐待の激白を受けて危機的状況にあるが、女と男のすれ違いを描くエネルギーにはいささかの陰りもない。『ブルー・ジャズミン』(13年)で「壊れゆく女」を演じたケイト・ブランシェットにはアカデミー賞主演女優賞をもたらしたが、本作で「壊れゆく女」を演じたのはケイト・ウィンスレット。その素晴らしい演技はいかなる賞を・・・?

ギャングと駆け落ちしたはずの、再婚相手の年上の夫の娘が突如戻ってきたところから始まる、女と男の思い込み、誤解、すれ違いの展開は如何に・・・?

1950年代のコニーアイランドの遊園地にある観覧車を舞台とした女と男の物語は、まさにウディ・アレン監督の円熟した境地そのものだ。あっと驚く結末を含めて、邦題通りの味わいをしっかり噛みしめたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■遊園地あれこれ。観覧車あれこれ。時代は?舞台は?■□■

人間は誰もが遊園地で遊んだ記憶を持っているはずだが、それには自分が子供だった時と、大人になって子供を遊びに連れて行った時の二通りがある。私の場合、前者は生まれ故郷の愛媛県松山市での記憶、後者は大阪や京都・奈良での記憶だ。しかし、観覧車となると松山での記憶はあまりなく、大阪での記憶しかない。また、梅田の“HEP FIVE”にある都会の大パノラマを上空から望む「赤い観覧車」や、2018年1月に10年ぶりに再開した大阪難波にある大手ディスカウントストア、ドンキホーテの“えびスタワー”が、近時大きな脚光を浴びているが、日本では観覧車は遊園地に不可欠な施設という



大阪 HEP FIVE の“赤い観覧車”



ドン・キホーテの“えびすタワー”

わけではない。しかし、アメリカでは・・・？

1950年代のコニーアイランドには、かつての賑わいは薄れたとはいえ、多くの人々が行き交う遊園地があり、そこでは立派な観覧車が回っていたから、さすが戦勝国アメリカ。もっとも、観覧車に乗れば、高いところから地上を見渡せるから、一時的に天下を取ったような優越感に浸れるが、それはちょっとした錯覚にすぎない。さらに、何度乗っても観覧車は同じところを回るだけだから、見えるのは同じ風景。したがって、1度は楽しいだろうが、2度、3度は乗ろうという気分にはならないのが常。客観的に見ても、それは孫悟空がお釈迦様の手の平の上で踊っているのと同じようなものだ。

本作の原題は『Wonder Wheel』。つまり、ニューヨーク州ブルックリン区コニーアイランドの遊園地に設置されている観覧車の名前だが、邦題は『女と男の観覧車』。しかして、観覧車に「女と男の」という「形容詞」をつけた意味はどこに？そして、ウディ・アレン監督がはじめてケイト・ウィンスレットを起用したそんなタイトルの本作で、42歳になった大女優はどんな役割を？

■□■ウディ・アレンの女優発掘エネルギーは今なお不滅！■□■

本作のパンフレットには、①ケラリーノ・サンドロヴィッチ（劇作家・音楽家）の「ウディ・アレン、演劇への急接近」、②井上一馬（エッセイスト）の「ウディ・アレンと女優たち」、③辛島いづみ（編集者）の「ウディ・アレンは女が壊れるときをよく知っている。」④内館牧子（脚本家）の『『観覧車』という隠喩』という4本の「REVIEW」がある。これらはすべて50年超のキャリアを誇るウディ・アレン監督の女優発掘を中心とする本質について書かれたものだから、本作をしっかり鑑賞するためには必読だ。

ハリウッドは近時、「映画界のドン」こと大物プロデューサーのハーヴェイ・ワインスタインのセクハラ騒動に揺れているが、ウディ・アレン監督はそれを「かわいそう」と発言したことで非難されている。その上、ウディ・アレン監督の養女であるディラン・ファローさんが2018年1月18日、米CBCのニュース番組「ディス・モーニング」で子供頃の養父から受けた性的虐待について激白したため、非難が殺到している。1965年の『何かいいことないか子猫ちゃん』から始まったウディ・アレン監督のキャリアは既に50年を超えているが、今や82歳にして最大の危機に陥っているわけだ。

しかし、そんな中でもコト映画に起用する女優に関しては、上記の4つの「REVIEW」にも書かれている通り、常に新しい女優好きのウディ・アレン監督は本作ではじめてケイト・ウィンスレットを起用しているから、そのエネルギーは大したものだ。

■□■あの大女優が本作でどんな「壊れゆく女」を？■□■

ケイト・ウィンスレットは、前述のREVIEWが解説している通りの①演劇のような雰囲気を持った本作で、②ウディ・アレン監督の起用に応え、③観覧車という隠喩の中で、④“壊れゆく女” ジニー役を見事に演じているので、それに注目！セレブ女性が転落していく姿を赤裸々に描いた『ブルージャズミン』（13年）（『シネマ32』27頁）では、ケイト・ブランシェットが「壊れゆく女」ジャズミン役を演じて見事アカデミー賞主演女優賞を受賞したが、さて本作で「壊れゆく女」ジニーを演じたケイト・ウィンスレットはいかなる賞を・・・？

遊園地で働いているジニーの夫、ハンプティ（ジム・ペルーシ）は観覧車の係ではなく、回転木馬の係。回転木馬もミュージカルのタイトルになっているほどアメリカでは遊園地に不可欠の施設だが、その稼ぎは多くないらしい。大きく歳の離れた2人は再婚同士だが、

ギャングの男と駆け落ちしたハンブティの娘・キャロライナ（ジュノー・テンブル）はその後、音信不通に。そのため、ジニーは1人息子のリッチー（ジャック・ゴア）を含む3人家族で暮らしていたが、リッチーは「火遊び」が大好きという奇妙な癖があったため、ジニーは苦勞しているらしい。また、この家族は昔の見世物小屋を改装した家で暮らしていたが、窓のすぐ外の観覧車が回る音で心が休まる暇もないため、ジニーは日常的な偏頭痛に悩まされていた。『タイタニック』（97年）では若くはつらつとした豊富な肢体を見せてくれたケイト・ウィンスレットが、本作では毎日の生活に疲れ、イライラしながら次第に壊れていく中年女ジニーの姿を、本作冒頭からしっかり見せつけてくれるので、それに注目したいが、他方で、彼女の息抜きは・・・？

■□■ 4人の微妙なバランスの中、もう1人が加わると・・・ ■□■

ジニーの不倫相手は海水浴場の監視員をしている若者・ミッキー（ジャスティン・ティンバーレイク）。もっとも、元舞台女優で女優への復帰を心のどこかで夢見ているジニーにとって、ミッキーの魅力は体育会系ではなく、ニューヨーク大学の学生という知性と劇作家志望というところにあるらしい。反セクハラ運動の高まりの中、自らも危機的状況にありながら、スクリーン上にジニーとミッキーの不倫状況を映し出すウディ・アレン監督の根性は大したものだが、ハンブティがちょっとニブいこともあって、2人の密会には誰にも知られず順調らしい。したがって、観覧車が見える喧騒に満ちた家の中に住むハンブティ・ジニー夫婦とリッチー、さらにミッキーを含む4人の人間関係は微妙なバランスの中、それなりに順調(?)だったが、そこに突然もう1人、キャロライナが加わってくると・・・。

レストランのウェイトレスとして働いていたジニーの前に、突然キャロライナが登場してきたことにジニーはビックリ。名前と境遇は聞いていたが、そんなキャロライナがなぜ今ここに？彼女の説明によると、ギャングの内幕をFBIに喋ったために、彼女は今ギャングから追われているらしい。釣りから戻ってきたハンブティはそんなキャロライナの姿を見ると、ギャングと駆け落ちした娘には2度と帰ってくるなど宣言したはずだと烈火の如く怒ったものの、ギャングから追われる身だと涙ながらに訴えられると、娘をかくまう決心をしたばかりか、なけなしの金をはたいて娘を学校に通わせ、再生の道を手助けすることに。ジニーもそこまで認めたものの、子供の治療のために必要なお金をハンブティがケチって出さない上、ミッキーが若いキャロライナに好意を示す姿を見せつけられると・・・？その上、キャロライナは露骨にミッキーとのろけ話(?)やミッキーとの恋の行方を相談してくるようになると、ジニーのイライラは頂点に・・・。

■□■ 思い込み、誤解、すれ違い。まさに人間は煩惱まみれ！ ■□■

ニューヨーク大学に通いながら、夏の季節だけコニーアイランドの海水浴場で監視員のバイトをしているミッキーが、なぜ約20歳も年上の人妻ジニーに惹かれたの？それは似

たような体験のある私にはよくわかるが、ミッキーのような若い男にとっては、ジニーのような年上の人妻との不倫と、ギャングと駆け落ちし若くして結婚経験があるとはいえ、まだピチピチのキャロライナのような若い女との恋は“両立”できるものだ。もちろん、それは望ましいことではなく、どこかで清算を迫られる三角関係かもしれないが、とりあえずキャロライナに一目ボレしてしまったミッキーにとって、それは将来のテーマにすぎないから、今はジニーに内緒でキャロライナといい仲になることに夢中だ。ところが、そんなミッキーの心の動きはキャロライナのジニーに対する“相談”によってバレてしまっていたから、そりゃヤバイ。

他方、文字通りの“火遊び”のため、学校や警察から呼び出しをくらうたびにリッチーの母親としてのジニーの心配が膨らんでいたのは当然。それなのに、キャロライナを置いて、その学費まで出しているのに、リッチーに対しては金をケチるハンブティに対するジニーの不満はどんどん増大していくことに……。もともと何ゴトにも鈍感なハンブティだったが、それでも今はジニーの毎日のイライラと時々発生する感情の爆発ぶりを見て、こりゃ何かあると感じてきたのは仕方ない。本作中盤は、キャロライナが戻ってきたことによって生じる、そんなミッキーを含めた家族間の思い込み、誤解、すれ違いに注目！これを見ていると、ホントに人間は煩悩まみれの動物だということがよくわかる。そして、思い込み、誤解、すれ違いの中心はもともとは家族内のものだったが、ミッキーを巡るジニーとキャロライナの“三角関係”が次第に鮮明になってくる中、ついにギャングがキャロライナのありかを発見する事態になってくると……。

■□■あっと驚く結末は？ギャングの恐さは？■□■

ミッキーを巡るジニーとキャロライナの三角関係最大の悲劇(?)は、ジニーとミッキーが不倫関係にあることをキャロライナが知らなかったこと。したがって、明日はミッキーと2人で食事をし、ひょっとしてその後は期待するような甘い展開に……？キャロライナからそんな告白を聞かされたジニーは、そりゃ耐えられなかったはずだ。しかしそれ以上の問題は、そんな2人のデートを、キャロライナを狙うギャングたちが黙って車で尾行していたこと。さあ、その後の展開は……？

ウディ・アレン監督はロマンチックコメディが専門で、ギャング絡みのスリラーものや犯罪ものは専門外だが、本作ラストに少しだけ描かれるギャングによるキャロライナの拉致事件は興味深い。この拉致がその後どのような殺人事件、さらに埋め込み事件につながったのかは一切スクリーン上に描かれないが、ミッキーと別れ、1人で歩いて帰ると言っていたキャロライナは今どこに？ひょっとして、キャロライナの情報をギャングにタレ込んだのは、僕たちの仲に嫉妬したジニー？キャロライナがいなくなった今、ミッキーがそう疑ったのもやむをえないが、さてその真相は？それを観客だけが知っているという本作の作り方はいかにもウディ・アレン監督風だが、キャロライナが失踪した後の父親の混乱

ぶりと、ミッキー、ジニーの狼狽ぶりは、それを観ている観客としてはメチャ面白い。

本作のイントロダクションには「女と男のすれ違いを描き続けるウディ・アレンが、あくなき理想を追い求める女性の魂の奥深くに容赦なく迫る 心ざわめくヒューマンドラマ」と書かれているが、なるほど、なるほど……。そしてまた、本作については『女と男の観覧車』とつけた邦題に拍手！

2018（平成30）年7月7日記